

女生徒ら北風の髪より顔搔き出す

恩田 甲

恩田甲は前年昭和四十五年の四月に千葉から八丈島へ転勤、不慣れな島暮らしが始まったようだ。この女生徒は高校生か、子供から大人への過渡期にある、いうなれば思春期にさしかかった青臭さを芬々と発散させている年頃の娘であろう。女子から女へ一步踏み込んだころの、南国の太陽に焼けて、いくぶん羞恥をふくんだ顔に、いきなりぱったりと鉢合わせをしたような驚きがある。千葉時代の作品はやや憂愁の表情も感じられたが、八丈島へ移り住んでからの句は無性に明るい。

雉子吊りて一夜眠れぬ山の音

八牧美喜子

どこか鄙びた山の宿でもあろう。雉子は昼間この宿の人が山で撃って腰に下げて来たものを、無造作に梁にでも掛けておいたのだらう。その絢爛ときらめく五彩の羽根の色は闇でも鈍い輝きを秘めているようなのだ。作者は床に就いてもその羽根のあやしい美しさに心をとめかせ

て眠ろうとしても眠りにつくことができない。そこへ山の音が重なる。

大氷湖落暉散乱しても無音

甲斐 虎童

この氷湖はどこだろう。場所はどこでもよい。とに角一望の氷の張りつめた大氷湖なのである。真つ赤に輝く夕日が、あたりの雲を染めてさながら真紅の雲母を振り撒いているのである。遠い雪嶺も、勿論湖面も、そして風さえも赤い。非常に賑やかな美しい赤い風景である。そんな眼には絢爛たる賑々しい風景も耳には何も聞こえない。しんと静まり返っているのである。静と動、騒擾と静寂、視覚と聴覚との大落差が感動を呼ぶ。この中で作者の姿は小さい。

一憂を封ずくらきに炉を塞ぎ

近藤 一鴻

冬から春にかけて何か気にかかることが一つ、何か考えごとなどしているときふと胸中に浮かんでくる。考えてみたところでどうなるものでもない。やがては時が来ればどうにかなるものである。しかしそれがつねに心にひっかかっているのである。憂いというよりは気がかりごととでもいうほどのものである。作者はその気がかりごとをも一緒に封じ込めるような気持ちで炉を塞ぐ。今頃こんな炉のある家、やはり大きな藁屋根の農家などを連想する。家の中もく

らい。

風邪の妻一語せし後寝落ちたり 田中 灯京

林火先生に「風邪の妻遅きわが餉に侍しをるも」があつて、私はこの句が好きでつねに愛誦しているが、この灯京の句も同じ発想になるもので妻のあわれさのよく出ている句である。高い熱が出たりして寝込まなければならぬほどの風邪ではない。軽い咳が出てどこか体が熱っぽくけだるい感じ程度の風邪であろう。この「一語」は何だったろう。「お先に」だったか、「お寝みなさい」だったろうか、あるいは帰宅の主人に「遅かったわね」だったかも知れぬ。

雪霏々といのちあるさへかなしき日 鹿山 隆濤

作者隆濤は昭和十四年、二十二歳のとき、国鉄職員として勤務中負傷、爾来三十有余年、不治の病人として臥床中俳句に親しんでいる。この句、病室の窓外に降りしきる雪のさまを背景として、わがいのちをつくづくと見つめている作者の相にはまさに鬼気せるものがある。室内には暖房があつてもやはり身も心も凍みつくような気にもなろう。いまいのちあることさえも不可思議に感じるときもあろうし、われながら哀れでかなしい思いをすることもあろう。

花も老いの紅あはあはと片枝垂れ 吉野 義子

世に姥桜という言葉がある。この句は姥桜の美しさである。京都の平安神宮の紅枝垂の老木の姿、木は老いて枝は片枝となつても花は今年も紅く咲く。しかし老木のかなしさ、紅も心なしか「あはあは」としているのである。一幅の絵巻。

散るさくら朽舟になほ櫓櫂添ひ 中川 美亀

この句は若狭小浜、三方五湖方面で行つた関西吟行会の折の作品ではなからうか。筆者も同じところを歩いたがそんな朽舟があつたかどうか。朽舟はあるいはあつたかも知れないが、それに櫓や櫂が添つていただらうか。しかしこの句は正に三方五湖の句である。事実の詮索などどうでもよい。永年の使用で瘦せ細つた櫓や櫂、そして舟の櫓の磨かれた櫓臍までが眼に浮かぶ。落花は水に落ちて花筏となり、朽舟に落ちては花の塵となるのである。

入園やおん母摩耶の小数珠享け 千賀 静子

私のところにも今年幼稚園に入った男の子がいる。入園後一週間目くらいとき、俄に幼稚園に行くのが嫌になって駄々をこねて困った。なだめたりすかしたりして行ってもらう。しかし、この子は誠にスマートなやさしい園児である。おそらく女の子だろう。うちの子供はキリスト教の幼稚園であり、指を額や胸に当ててのお祈りは教えられているようである。この句の「おん母摩耶」は釈迦の生母。この幼稚園は仏につながる。「小教珠」がやさしく、また、明るくほほ笑ましい。

卒業歌島を出でゆくものばかり 多宮 進

作者が小豆島に住むということだけでなく、この句一読、映画「二十四の瞳」が思い出される。あるいはこの卒業歌、十二人くらいの生徒が声を揃えて歌っているのかも知れない。その類には涙が伝っていることだろうし、声は咽喉につまって十分出ないかも知れない。そんな歌を一首に歌っているが、明日は東京へ、名古屋へ、大阪へちりちりばらばらになるのである。その子供らの将来にはどんな運命が待っているのだろう。

咲き垂るる藤序破急を一房に 荒井 正隆

この句、「序破急」が急所である。この言葉で面白くなった。既成の言葉を借りて藤の姿を如実に描き得た。序破急とは舞楽の三形式、また能楽演出上の順序であるが、連歌誹諧にもこの言葉が援用されて連歌一卷の運びを規制している。良基の『筑波問答』では序は「しとやか」破は「ささめき句」急は「逸興あるよう」といつているが、これをこの句の鑑賞にあててもよい。しかしただ単に、「はじめとなかとおわり」というくらしいの意に解しても十分面白い。

牧草を刈らんとすでに濡れるたり 下田 稔

筆者の田舎なども、夏場はどの家の人も未明に起きて裏山へ牛のための草を刈りに行った。私が目覚める頃にはもう青いよく伸びた芒や、葛の葉の混った雑草を、その姿が埋まってしまうほど背に負ってムクムクと帰って来た。それは青い草の山が動いているようであった。あの頃、その人たちは山へ出かける前から濡れていたであろうか。

四十路尽くハンカチ汚しては替へて 三浦 紀水

紀水は「濱」創刊の翌年頃から俄に脚光を浴びた。その後彼にはいろいろのことがあったようである。長い休俳もあった。その彼が知命の年になったのである。「ハンカチ汚しては替へ

て」にはどこか庶民の生活の匂いがある。天命を知った人のあきらめとともに平穏な毎日が続くことの安らぎの心も感じられる句である。

遠く見え墓癒すなる梅雨の海 宮津 昭彦

特別作品「小豆島」より。「放哉墓前」の前書がある。放哉旧居南郷庵は確かに海近い気配はあったが、海は見えなかったと記憶している。私は墓は知らない。匆忙の旅で教えてくれる人もなく墓までゆく余裕がなかった。墓からは遠いところに海が見えるのであろう。「墓癒すなる」はいい得て妙。遠い切れっ端のような梅雨の海が、この放浪孤独の詩人の墓を慰めるごとく、青く煙っているのである。

曼珠沙華 額田王の恋に枯れ 菊川 芳秋

作者は九州福岡の人、この句は「奈良行」として発表された五句のうちの一句。筆者は紅顔の頃から現在に至るまで額田王に恋い焦れて来た。額田王は鏡王の女で、はじめ大海人皇子との間に十市皇女を生んだが、後に中大兄皇子の後宮になった。弟の妻を兄が取り上げてしまったのである。この三角関係の大ロマンはあやしく美しい。この恋愛事件が壬申の乱の一つの根

になっているのかも知れない。その思いを内に秘めた灼熱の恋が曼珠沙華をも枯らすのかも知れない飛鳥の地である。

炎天の海に船影なきを怖る 杉本 寛

じりじりと照りつける太陽の下でただ茫々とした水平線に向かって立っている作者。石ころの浜と海だけの風景、空洞のような海は小さな伝馬船一隻を点じることもなくただ平板に横たわっている。この海にせめて一艘の舟でも浮かべばあるいは一つの救いであらうに、何と恐ろしい風景であらう。作者は暑い日を満身に浴びて立ちつくすのである。夏の真昼の怪奇。この海、舞鶴付近の日本海らしい。

川のぼり湖の鳩寄る地藏盆 金子 篤子

このあたり金子篤子の作品はしつとりと潤いをおびて人の心を包み込んでくれるような温かさが感じられる。優にやさしい眼がある。地藏盆は関西の行事、八月二十三日、四日は子供のお祭りである。この句は近江堅田の地藏盆風景である。小さな野川へ琵琶湖の鳩がのぼってくる夕風のひととき、子供らが打つ鉦の音も渡ってくる。

高燈籠 灯して 大樹 雫せり 福井 草以

福井草以はこの翌年八月に死亡した。草以の句は一貫してほのぼのとした叙情に支えられていた。彼は切子や灯籠を好んで詠んだ。このごろの都会の墓はお墓の団地、中にはコインロッカーのようなものもあるようだが、田舎の墓は昔のままである。大きな木もあるし蟬も鳴いている。しずくを落とす大樹の陰に灯る「高燈籠」、草以らしく美しいあわれ深い句である。

うつそみの 黄泉の 精靈^{みたま}に 蹤き 踊る 大石 白夢

白夢も昭和四十八年十二月に没した。草以と白夢は舞鶴と静岡と遠く離れていながら何故か特に親交があった。どこかの鍛練会の帰りに草以は白夢に誘われて静岡で下車、一緒に吟行したりしている。その二人が一年を隔てて死去したというのも何かの因縁であろうか。この句、遠州水窪町の送り盆に材を得ている。この頃の舞踊のように振り付けられた盆踊りは論外であるが、田舎の昔からの盆踊りは、黄泉の国から戻ってくる精霊を慰める念仏踊りの形をそのまま止めているのが多い。この踊りもそんなたぐいであろうか。「黄泉の精霊」は前を踊ってゆく人の背であるとともに黄泉の国からの盆の間中この世に戻ってくる亡者の精霊の姿である。

しみじみとなつかしく、また鬼気せまる思いもする。

櫓子より 見ゆる 峯雲 弥陀 こもる 田中 蒼子

この句はたしか大和五条の流灯を見にみんなで吟行した時の作品であった。この句だけが異彩を放っていた。堂に登ってその櫓子窓から外を見ると格子の間から切れ切れに遠い峯雲が白く浮かび、堂中にはひっそりと阿弥陀如来が印を結んで座っている。全身をにぶく金色に光らせながら、さながらに暑にこもっている姿である。「弥陀こもる」はいい得て妙。

甲虫 死ぬまで 飼ひ きみな 死に き 山上カヨ子

秋も漸く深まり、子供の飼っていた甲虫も一匹ずつ死んでゆく、子供はそれをどんな気持ちで観察しているのであろう。夏から秋そして冬への時間の推移が、甲虫の死によって小刻みに刻まれてゆくようである。大人は冷静に非情にこの甲虫の死を見つめて秋の深まりを見つめているようである。

母も暑かろいたこの口ゆ母のこゑ

関川 竹四

課題競詠の試みは「濱」としては初めてのもので、この時の題は「山」であった。関川竹四は伝説の山恐山へ登って「いたこ」を中心に詠いあげた。作者はほんとうに今は亡い母と話している。そのいたこは優しかった母とは似ても似つかぬ姿形をしているとしても、あの世の母の化身として母の言葉を吐くのである。

山中に解脱して蛇穴に入る

村越 化石

この蛇は深山に生まれ、深山に育ち生きてきた蛇である。春三月蟄を啓いて出てきてから夏、秋とこの太陽の下で、草の葉陰で雨露をしのぎ、恋をし、蛙やその他の生きものを犠牲にして生きてきた一夏であった。それが今ここに木々は葉をふるい、山肌を吹く風も一段と身に入む昨今、今まで鼠や蛙たちに恐れられ、人に嫌われ誰一人として味方とする者のなかった娑婆、その輪廻の世界から解脱して今はしずかに穴に入らんとしている。この蛇、あわれで哀しい。

まだ角があり恋があり雄鹿駆く

金子無患子

この句は弾んでいる。「あり……あり」と重ねたことによつてリズムも弾む。角もあり恋もある鹿もやがては角も落とされ冬に向かうのであるが、この雄鹿はまだ若々しい姿で駆け廻るすこぶる健康的である。

繭形最中白箔こもり望の夜や

中戸川朝人

中村草田男に「厚箔割ればシクと音して雲の峰」という句があり、厚箔などというものが俳句になることに非常な驚きと、素材の風変わりな新しさに感銘を受けたことを今もまざまざと思ひ出すことができる。この朝人の最中の中にこもる箔も今になればしやれた句として面白い。「望の夜や」というやや不安定な据え方も却つて流動感があつて美しい。

切株は萩とても鋭し十三夜

鳴戸 海峡

春は青い芽もやさしく、夏の終わりから初秋へかけて枝の先端から小さい花をつけて風にな

よなよと揺れていた萩も、刈られて切株となれば、斜めの切口は鋭く、それが十三夜の月光の下では、白く浮いて目に痛いようである。そしてこれから訪れるであろう永い冬を耐えようとしているのである。この句、たしか山城薪の一休寺での作である。

(猿橋統流子)

——昭和四十七年

わだなかは祭めきけり飛魚とび 堀 喬人

一望千里の変哲のない海上をながめても眼をたのしませてくれるものはない。そんな時、船の航路の真近に群をなしての飛魚の飛翔でもあれば、船内はどつと湧き返りお祭騒ぎとなるのは当然である。飛魚の飛翔の銀色の輝きはお祭の出しもののはれがましさに似る。作者のはずんだ心の動きが「祭めきけり」で見事に表出されている。

今年竹長子授かるまで永し 伊奈 秀典

もれ日に輝く今年竹の幹は琅玕の如く美しい。それに見とれていたある日、妻の受胎を告げられた。待ちに待った一瞬である。よろこびと安堵感で作者の大きな体は軽々と宙に浮いたの

ではなかったろうか。さてわれに返って今日か明日かと一日一日待ちこがれたこの日、永かつたなという実感が先ず優先した。喜びを直接的に表現せずに、逆に待ちつづけた長さを告白することによって喜びの深さを表出している。今年竹の美しさと素直さをもつて来て初子のすこやかな成長を念ずる、心にくいまでの配慮がなされている。

七月へ光る一点樹上の人 櫛原希伊子

「光る一点」に焦点がしぼられている。それが樹に登っている人だったというのは一向に面白くないのであるが、出だしの「七月へ」が千鈞の重さをこの句に与えている。梅雨明けした炎暑の七月、もの皆炎える候である。樹に登っている白シャツの人も太陽の直射光で光の一点と化して見える。その一点の光が作者に一直線に反射している。作者自身も光り輝いて、想像の世界へ昇華してゆくのである。

合歡咲いて遠くの雲の近寄らず 近藤馬込子

日中の炎暑に耐えた身の、日も落ちて残照の消える前の一とき、涼を求めて河原にでも出た作者の眼前に淡紅色の繊細な花弁を広げた合歡の花。作者を夢の世界へ誘う。合歡の持つ現実

的な夢と、雲の持つ空想的な夢とは異質であるが、二つの夢が一体となって作者をつつんでもらいたいとする願望は、「近寄らず」でかなえられないのである。夏の夕暮れの憩いのひとときである。

走馬燈 青き河童の匂ひ立つ 原田 桃里

作者の住む碧南市の台地の裏側に蓮如池がある。池には古くから河童の伝説がつたわっている。桃里―河童―法城子と私はいつも結びつけて考えてしまうのである。妖しく廻る走馬燈から青い河童と「匂ひ」とを連想したことは、原体験だけにゆるぎなく定着している。

瓜抱いて足柄の子の川あそび 下田 稔

七沢温泉での所産と聞いている。裏丹沢の谷間の集落にはまだ田舎が残っている。最近ではついぞ見かけぬ瓜を抱いて遊ぶ淳朴な子供から、金時の熊との相撲を連想し足柄へと結びつける。それでこの句が成立する。この地へは四、五回は行っているはずである。数多く歩くことは尊い。

山の荷の雲海の上に届きけり 小倉 岳杏

何でもない情景である。雲海の上に立つと眼はみんな雲の方にばかり行ってしまう。雲海の上にそびえる山々の姿や、その動きに注目してしまう。作者は長い休俳をつづけていた。初にかえっての復活である。

浮き桶に「たま」の名の揺れ渡り海女 小松原みや子

渡り陶工は轆轤をかついで窯場を歩き、渡り板前は庖丁一本である。渡り海女は桶をかついで行くのであろうか。天草採りの海女である。岸に近いところでの作業であり、作者は海女との会話から渡りということを知ったのであろう。それからの作者の海女へ寄せるいつくしみの情が一層強くなった。「たま」の名の揺れが、それを如実に示している。波間に浮かんでいるにすぎない桶と海女とのつながりが一体となる。単に道具としてのものでなくなり、生命が通う。「たま」という名も似つかわしくこの句を生かした。

香港の溽暑人力車夫に憑かる 島田 秋芽

作者秋芽の顔がその雑踏の中にある。いつくしみの眼も感ぜられる。大陸に四、五年いたのでその情景は理解できる。雨期を持つ南中国の暑さは正に溽暑という言葉にぴったりなのである。「憑かる」という言葉も誠にむずかしいが、この句では「すがられる」という意となろう。一般的には靈魂などにのりうつられることに用いるようだ。執拗にまといつかれたのであえてこの語を用いたのであろう。それが溽暑とびったりと付いている。付きすぎを救ってくれたのがホンコンという軽快なりズムだ。

湖二つ 郭公 訝し合ふ距離に 川村 紫陽

郭公はところによつて鳴く時期を異にする。五月より六月にかけて盛んに山麓で鳴くが、信州などでは七月から八月の上旬まで聞くことができる。遠く近く、右に左に郭公が鳴き交わしている。その訝のとどく距離に二つの湖が静かに水をたたえている。その二つの湖の間は深々と森がつづいている。何か日本の情景よりもヨーロッパあたりの情景を思わせる。森の中程に古城でもあればまさに格好な風景となる。中々しゃれた捉え方である。

雲や水やかさりと蜻蛉ふれ合ひし 荒井 正隆

秋である。炎暑の灼けつく無音の世界から空気も澄み水も澄む頃となる。風にも音が生まれる。それも微妙な音だ。古来より日本人は秋風の音に人生の無情を感じて来た。赤々と染まつた夕焼雲、それを映す水。極楽浄土を彷徨している如き作者を、現世に連れ戻したものは、頭上を飛び交う蜻蛉の翅の触れ合うかすかな音である。「かさり」という擬音は適切であり、「雲や水や」の呼びかけも大らかで豊かである。

鮎落ちて 紀の国 月夜濃き杉よ 鈴木 達弥

産卵を控えて上流から中流へと下る鮎、そんな時節になると秋もようやく深まり、何となく淋しさを増す。紀州には有田川・紀の川・熊野川などの河川がある。紀の国はまた木の国であり多くの美林を有している。この句、一幅の南画である。「紀の国月夜」が調子も整っているし、すがすがしい感じを与える。「鮎落ちて」の出だしも非凡である。月夜に浮かぶ杉林の美しさが何ともいえない。作者の代表句の一つになろう。

見守れる子の恋長し星祭 黒坂 綾子

最近の男女の交際には婚約時代をたのしんでいる節もある。いつでも結婚にゴールインできる状況にありながら中々それを実行しない。互いの両親にしてみれば誠にじれったいのである。あたかも今日は七夕である。牽牛・織女の一年に一度の逢瀬を機会に、長い恋愛生活の結実を望みたいとする親の気持ちが胸に痛い程わかるのである。

花野行く車中母子の綾取りに 永井 正夫

高原での所見であろう。母子の車中での綾取り、花野からして高原の観光バスでの所見であろう。母子は並んで掛けている。指から指へ、次第にむずかしくなる綾取りを交替している。綾取りの糸は何色だろうか。花野行く車中、秋の水色としたい。たとえ色がなくても綾取りの綾に豊かな色を感じる。

ぢぢばばに盆会の大き雁もどき 西村 公鳳

喜寿をすぎた作者である。郷土の風物の中からとらえられる生活感情を詠い上げている。従って極めて土くさく颯爽とはしない。しかしながら底からにじみ出てくるあたたか味は何ともいえぬものを持っている。「ぢぢばばに」といい「雁もどき」といい、極めて土俗的な言葉であるが一読して句全体からやばったさを感じない。それは「盆会の」のためである。「盆の大きな」ではこの句を通俗的にしてしまう。公鳳さんは通俗的な作品になる手前で踏みとどまっている。あの芸当は習練を積んだ人にして始めてなし得ることであると誰かがいったことがある。私も大いに賛成である。

女案山子の腰まとはぬを担ぎゆく 大熊 輝一

何ともいえぬなまめかしい句である。「腰まとはぬ」がエロチックの原因である。腰布の有無にかかわらず案山子は案山子としての役目をはたし得るのである。案山子に性別があらうはずはないのであるが、女のをりををさせて女案山子といえば成る程と人を納得させられる。自から鋤を振るって励んでいる百姓なればこそ出来る作品である。

義父の加藤氏は本場で材木関係の仕事をしている。本人も印刷関係の職人としての立派な腕を持つてゐる。職人生活が長いだけにある意味において中々いなせである。東京の下町独特の情緒を詠わせると見事である。この句、筏を浮かしてある木場の掘割で、筏が汐できしむ音を出したというだけの材料にすぎない。ただそれだけのものを、「寝待ちの汐」ていなものをもつて、こられちゃ、参った、参ったといわざるを得ない。

風 ひとつ凍みて 白山 遠くせり 宮津 昭彦

ひとつぼつんと上がっている風が微動だにしない。凍みついて空に嵌め込まれているように見える。真白く雪に被われた白山が、本来ならば間近にせまって見えるのであるが、白山の上の空に上がった一点の風のために遠景として浮かぶのである。絵画の遠近法の手法をこの作品は極めて巧妙に取り入れている。遠景を遠景らしくするには前景を高いところに置けといわれており、遠景の広大さを出すには前景で地平線を断てといわれている。

眠りても 主峰よ 端山うごかれぬ 保田 てい

ここには俳諧の諧謔がある。主峰が雪を被つて眠っているすきに裾にある端山は逃げ出そう

とした。しかし主峰の重みは端山の裾をしっかりと押さえているので、逃げようとしても逃げられない。元来山眠るが擬人化から来ている。その擬人化を再度巧みに利用している。端山も眠る山であつてうごくことはあり得ないのであるが、それを逆に利用しているのである。作者は七十歳を過ぎた刀自であるが、作品は艶を帯びてやわらかである。

百歳に 日を重ねる 日向ぼこ 増田 達治

この句、なかなかこつている。林火師は口癖のようにいつていた。二百五十号記念の時は三百号まで生きられるだろう、三百号の時は三十周年まで生きられるだろうと。ほぼ五年きざみである。還暦の時は一度に古稀まで生きられるとは考えなかつたという。私も四年で還暦であるが、今のところいつまで生きられるだろうかと考えたことはない。百歳になつてそれから何年生きられるだろうかと考えることは恐らくないに違いない。一日一日が寿命の伸びである。一日一日が尊い。日向ぼこはその一日一日をはぐくんでいる。

宮津線 またぎ 冬田の 畦ふたたび 茂里 正治

宮津線は西舞鶴から山陰線の豊岡までをいう。丹後半島の脚部を貫いて行く。勿論単線であ

る。宮津を除いて目ぼしい町はない。単線というのは何故かうらさびしい。路盤が狭いのは勿論だが、往きも帰りも同じレールの上を走ることだよりなきを感じる。田の畦が路盤に直角に百足の足のように伸びて、幾何学模様をなしているに違いない。田の畦を来て路線をもたぎまた田の畦に出てしまう。ローカル線のたたずまいを「冬田の畦ふたび」で活写しつくしている。

籠のさざえ蓋あけてをり春の航 野川 釈子

遠洋の航海ではない。関東でいえば大島通い程度の近海の航である。島見物の遊覧船の帰路である。土産のさざえが、檜葉を入れた籠に入っている。親しい者同志の旅行会で出掛けたように思う。誰かが土産のさざえ籠に眼をやったら、仲間のたのしい語らいに和するように蓋を開けていた。喜びが「春の航」という一語に凝縮されている。何ともいえないたのしい春の旅を味わせてくれる。

花曇り酒も満たせし鉄鉢ぞ 羽部 洞然

「松山・山頭火一草庵」の前書がある。勿論この頃は杉雨・白夢と同行三人である。放浪の行

乞俳人種田山頭火の終焉の地一草庵にてのこの句は、何か作者の現在を暗示しているようである。この鉄鉢は、昭和六年、熊本に落ち着こうとして落ち着けず再び旅へ出る時に携えたものである。自嘲の句「うしろすがたのしぐれてゆくか」につづく「鉄鉢の中へも霰」の句の鉄鉢である。「花曇り」が酒を愛した山行水行の山頭火をよく表徴している。

春の雲「国来」と引きし岬延び 猿橋統流子

出雲の国は狭いので、大山に縄を掛け陸の一端を「くにこ、くにこ」と声をかけて引き寄せたのが今の島根半島だという伝説がある。大陸人が出雲へ渡来して干拓を行い、国造りを行ったことをそのような伝説でつたえているのかも知れない。ともあれこの句はその伝説を踏まえて成っている。「春の雲」のやわらかさと豊かさが古代の国造りをおおらかに表出している。

「岬延び」が眼前の景を直視して古代への橋渡しの役をになっている。

霜くすべ這うて鈴鹿にひとつ星 甲斐 虎童

霜の降るのは晴れ上がつて冷えこむ日である。この句の一つ星は宵の明星である。それが翌日の晴れをつけている。広重の東海道五十三次のうち名作は、役物といって十一あるが、鈴鹿

峠を越える旧東海道筋で五つをなしている。中でも庄野は蒲原と共に最高だという。おそらくこの句の情景を広重が知っていたらまた傑作をふやしただろう。

つくづくし己れひとりの母ひとり 田口 俊子

孫を持っている作者にとっての母親の健在はどんなにかうれしいものであろう。子供もすっかり育て上げ、親としての責任をはたし終えて、これから十分に母親の面倒を見てやれるよるこび。一人の母に一人の子。二本並んで生えているつくくしを見ての感慨は女性らしい繊細さを示している。しかしその母も今年に入って失ってしまった。作者にとって一生忘れ得ぬ作品となろう。

おくれきてみろくの辻の夕蛙 齊藤千代子

「みろくの辻」は奈良から山城路を岩船寺に向かう途中の、弥勒・如来の二つの磨崖仏へ行く別れ道にある。場所の詮索はどうでもよい。弥勒の名を冠した辻。何故か済度への道を示されているような感を受ける。作者はその辻へ遅れて到着した。仏の慈悲は蛙を鳴かして済度の彼岸へ作者をみちびいてくれたのである。「辻の」「の」が非常に強い役割をなしている。

事實は午前中での経験であったが、それを夕べに持って来たのも、この句をゆるぎないものになっている。

送水会そうずえの炎のあと聴くは山の雨 中川 美亀

三月十二日のお水取りの十日前、三月二日に若狭の神宮寺でお水送りの行事が行われる。それが送水会である。その夜、諸種の行事のあと、松明行列を組んで遠敷川の川上、神宮寺より約一キロの鵜の瀬に至って、送水、文水切り神事を行い、お香水を淵へ流し二月堂へ送るのである。作品の「炎」は水切り神事などを行う鵜の瀬の炎なのである。お水取りが火の祭であると同様、送水会も火と水の祭である。祭の終わったあとの山の雨を聴く作者の寂寥は何ともたえようもない。

(松崎鉄之介)

——昭和四十八年

七日干し蒟蒻さきはなるがまま 井上三千女

初冬のやわらかな日射しの中の、道端に連なる蒟蒻のすだれ干しはなかなかの景観であろう。

そしてうらうらした小春日和に恵まれるか否かが、蒨蒨の出来上がりに影響するとすれば、蒨蒨農家の人達の祈るような気持ちもわからないわけではない。作者は「七日千し」たあととは「さきはなるがまま」と突き放しているが、その底に流れる深い思いやりがうかがわれる。

上流は加茂も迅しよ千鳥翔つ 金子 篤子

加茂川の上流といえは鞍馬川の落ちこむ辺りというのであろうか。悠久たる京都の歴史を語るに相応しいおだやかな下流とは違つて流れも迅い。この辺りから二軒茶屋・市原鞍馬を経て薬王坂・江文峠を越えてゆけば『平家物語』の大原御幸の道である。厳しい冬、迅い流れの中に遊んでいた鳥が作者の気配におどろいてか飛び翔つた。それが千鳥であつた。後白河法皇の通られたのは五月二十日すぎというから、千鳥を見られたはずはないが、作者の胸を去来したものは何であつたろうか。「加茂も迅しよ」が新鮮である。

虹立てり天の半ばは雪降りゐて 金子無患子

冬の虹というのは大変珍しい。太陽の位置の関係でそうなのであろうが、それだけに稀に立つ虹は鮮やかで美しい。しかも「天の半ばは雪降りゐて」という時である。作者はまことに幸

運な機会を得て、しかもこれをいい得ている。構図の妙というか、読む者をして不思議な美しさを感じさせる句である。

雪に十歩遠きに出でて居ることし 村越 化石

失明という痛手を負いながら心眼を失わず、俳句を詠いつづける作者の偉大さについては、筆を加える必要はない。特にこの一句、雪深い草津のさりげない日常生活を詠いながら、高邁な精神の輝きを感じられ、安易なる自分の作句態度をえぐられたこと思ひで一杯である。「永遠の旅人」の途を示している句といえよう。

冬の江に昼の外灯喪の葉書 原田 桃里

林火先生のお供をして、矢作河口に千鳥をきき白魚舟を見たとき、一夜ご厄介になりお母様にもお目にかかった。黙々と数多い子供の友人のために鶏を、人参を料理する母親、妻。それに風光明媚なる碧南の山河、蓮如上人を象徴とする歴史と宗教の渾然たる一体感、作者はまこと家族と風土に恵まれたと羨望したものである。その家族と風土とが作者の句業にプラスしたことも否めない。掲出の句、その構成の新鮮さ、巧みさは作者自身にとっても一つの台を跳び

越えた作品である。

鳴の羽に雪降り汀まで寄らず 猿橋統流子

作者は特作のために湖北を訪れた。何度も歩いて勝手知ったところで佳句を得ることは難しいことである。未見の土地に対するような期待やおどろきは少ない。その代わりその土地に対する深い愛情がある。その中で新しい発見をした時、おどろきにぶつかった時こそ佳句が生まれるのだと思う。この句、作者の執念が凝り固まっている。「鳴の羽に雪降り」の細かな観察が雪と鳴と湖をひとつにし、名画のごとくしかも眼前に迫る思いを与える格調高い作品である。

東風かすか過ぐ妻問ひの音ならず 佐野 美智

八丈島に遊んだ時の句である。漂流、流刑の歴史が明るい常夏の島にいつも沈潜している。一年に一度妻を訪ねて青ヶ島から渡ってくる若者の伝説「妻問ひ」への思いが、かすかな東風が契機となって作者をして現在を忘れしめ歴史の世界へ導いたのかも知れない。女性ならではの思いを強く感じさせられた秀句である。殊に「音ならず」に深い思いやりが溢れている。

雪国へ湖の平らを見つつ近し 荒井 正隆

雪国へ向かう気持ちで溢れている。おそらく米原から北陸へかけての車中からの属目であろう。特別作品に取り組むという決意が十分にうかがわれる。特に「湖の平ら」は巧みな掴み方で作者独自のものである。これから入る雪と風の暗い北陸と対照的な、琵琶湖の広さと明るさと穏やかさとを表して、作者の未知の世界に入る怖さと冒険心をまで訴えているとさえ思わせられるのである。

日が入つて白梅の冷え津に残る 甲斐 虎童

東奔西走の言葉がびったり当てはまる作者の多忙な激務の中に、俳句に対する強い愛着と真摯な勉強努力はスランプのつけ入る隙を許さないといっても過言ではなからう。早春の港町は日がおちるとともに急に冷えが増してくる。その冷えとともに白梅の香がそこはかとなくただよってくる。しっとりとしたけれん味のない余情あふれる作品である。

仏母在し辛夷は乳の白きなる 中川 美亀

仏母は摩耶夫人、それが祀られている摩耶山上国民宿舍摩耶ロジが吟行会の会場であった。仏母が在すという信念のもとに、母と乳の白きのつながりは鮮やかである。林火先生ご自身も「肝心のところを忘れた。私達の完敗である。私も大魚を逃した思いである」と語られているが、作者の勉強ぶりの現れであろう。辛夷の開花はまことに唐突で私達の目をおどろかす。丈も高く、早春新葉に先だち花を開くところにその印象がつよいのかも知れない。まさに春を告げる花といふべきであろう。その花の白さはまぶしいばかりであるが、乳の白きの比喻は女性ならではの感もある。

彼岸満月揚舟に砂白きかな 伊藤 京子

漁も休み、舟も砂浜に引き揚げられている無人の浜辺、折から皓々たる満月が早春の肌寒い大気の中に輝いている。引きあげられた時についた砂が、月光に映えてきらりきらりと白く光っている。静寂の中に何か暖かさを思わせるのは春彼岸の故であろうか。「彼岸満月」がしっかり定まっただけで動かない。

東の間に光りて落花二度光らず 菊川 芳秋

桜の風に乱れ散る花吹雪は華やかな絢爛さがある。しかし一とひら二たひら散るのは淋しさをかくすことはできない。そして地に舞い落ち川に流れ去るのも長いようでいて東の間のことである。作者はその東の間に春陽を浴びての一瞬のきらめきをみたのである。しかし再度光ることはなかった。そのきらめきも、「二度光らず」とみたことも作者が心で見、心に納得させたことかもしれない。落花の哀れ、春の愁いがにじみでいて心豊かな作品である。

病妻に牡丹崩るる雨烈し 松崎鉄之介

鉄之介の手篤い看護の甲斐もなく昭和四十九年一月四日奥さんは逝去せられた。蒲郡の鍛錬会のあとも良い葉があるときき草深い田舎へ寄っていったこと等、作者の奥さんへの深い愛情がつくづくと思ひ出される。崩れるような牡丹の散りぎわの姿ははかないものである。まして烈しい雨に崩れるそれは、はかなさというよりは無惨の感さえある。作者は不治の病と懸命にたたかっている妻の姿に思い合わせて胸をかきむしられる思いであつたに違いない。

流し雛わが手離れしより形代 吉野 義子

形代とは神を祭る時に神霊の代わりとして据えたものであるが、近来は厄除けの身代わりとして紙の人形などで身体をなでて災を移し、川に流すものをいうようである。「わが手離れしより」が実に流離の気持ちをしつかり表現していて、流れゆく雛に厄除けを願うとともに、人の世の無常をつくづくと思ひ合わせている作者の人生観がひしひしと胸に迫る。「形代」といふところ、いきたるにその感がよけいに深い。

引鳥のばらばらと落ち渦に舞ふ 田中 螺石

鳴門観潮の作品である。春の初め北方へ帰ってゆく雁や鴨・山雀・四十雀などの小鳥達、それは来る時の渡りの壮観は見られず、大群をなさないだけに淋しさもひとしおである。その引鳥が大鳴門の渦の上を帰ってゆく。渦の激しさは飛ぶ鳥をさえ引きこみそうである。引鳥の淋しさと大鳴門の渦の豪快さが目の前に浮かぶようである。

海女涼し桶にすがりし子に教ふ 近藤 一鴻

公私ともに多忙の中で作者の作句欲はますます旺盛である。当然のことを当然のように詠んで格調高い作品を生む、所謂自在の境に踏み入ったごとく思わせる今日この頃である。句意は単純明快であるが、「海女涼し」の上五の中に親の愛情をさりげなく包んで、むしろきびしく教えている海女の心境のほどをいいつくしている。作者もまた胸中溢れるものを押さえていたことであろう。

沖よりも鬱然と暮れ梅雨の島 稲垣法城子

作者の的確なる写生眼に感心させられた句である。梅雨時は寒いといっても夏である。死ではない生の世界であり、動の世界である。沖よりも梅雨に暮るる島の姿を鬱然と把握した眼の確かさ。そして「沖よりも」の上五によって、暮れて見えなくなりました島が逆に前に押し出され浮かびあがった感さえある。年季の入った句で、格調高い作品といえよう。

新能めらめら古き闇燃ゆる 大串 章

幻想的な美しい句である。この句、奈良興福寺の新能であろう。昔は旧二月に行われていたが、今は五月十一、二日に行っている。「めらめら」は火の勢いがよくもえひろがるさまをいうのであるが、語意よりも耳にひびく感じに妖しげなものがある。そして古都の闇の一隅の炬火が、能の進行とともに巨大な火勢となつてひろがつてゆくような錯覚さえおぼえる。「古き闇」に感覚の鋭さと若さがあり、句を美しいものにした。

子に遠くあり霞みつつ岬延び 田中 菅子

「小豆島」と題した特別作品の一句。島を巡るお遍路さんに逢える楽しみを期待し、またその期待にはずむ胸に応えるごとく行者堂でめぐり逢い、その生活へのとけ込みを詠いあげているが、その心の一端を占めているものは夫なき家に残してきた子供に対する母親の思いであろう。霞みつつ瀬戸内海へ延びる岬は子のもとに届けと願う彼女の母性愛でもある。胸をうたれる秀句である。

七日臥し七日の茂りひそかなり 大川つとむ

透徹した写生の眼は七日の臥床の間の自然のうつり変わりを的確に捉えている。特に若葉の頃の爽やかな新樹の茂りには目をみはるものがある。しかし作者は「ひそかなり」といつている。そこに作者の心情がうかがわれる。人目を避けるごとくこっそりとした茂り。病臥であろうか、作者の臥床を恥じるような、快癒の遅きを腹立たしく思うような気持ちと、丹精こめられた庭の様子が目に浮かぶようである。

子を泊めて廻灯笼いつまでも 田中 灯京

おそらくお孫さんを対象とした句であろう。折角泊まれたお孫さんが夜になって母恋しと駄々をこねられたのであろうか。そのご機嫌とりに廻された「廻灯笼」はお孫さんが寝入られてもまだたんとと廻っている。灯笼とお孫さんの寝顔を交々見つめながら当惑と愛情が交錯するような作者の顔が、「いつまでも」によく表現されていて目に浮かぶようである。

塔聳てり青葡萄みなさかしまに

宮津 昭彦

作者は静岡時代、東京時代につづく岡山時代を形成せんとする意欲に燃えている。特に岡山
の風土と歴史に根づいた句作の一端がうかがわれる。掲出の句、吉備路に残る古塔であろうか。
はるかにそびゆる塔と眼前の青葡萄、素晴らしい構図の妙といおうか、おもしろさである。未
熟の「青」も良いが、「みなさかしまに」といいきって微塵のゆるぎもない句にしたと思う。
塔にまつわる伝説などとも思いたくなる作品である。

猫呼べばぞろぞろ仔猫蹤ききたる

大石 白夢

白夢さんは昭和四十八年十二月十七日永眠された。「冬空は遠き世のこと鳥翔け去る」はそ
の辞世句である。掲出の句、ユーモア溢れる作者らしい類笑ましい作品である。人生派たる作
者の面目躍如たるものがある。句意明瞭、しかし読めば読むほど味わいある句であり、思いや
りの深い句でもある。心より御冥福を祈りたい。

みちのべの石に婆ゐて盆の果

山崎和賀流

「濱」は、いや俳壇は惜しい青年を一人失った。昭和四十九年三月十六日和賀流は急逝した。
川風とともに送り火は山の彼方に消えて、魂祭る盆は終わった。帰郷者もまた都会へ出かけて
ゆき村は静かになった。そして生活のための歯車は動き始めた。しかしみちのべの石に座って
いる婆はいつまでも送り火を見送っていて動こうともしない。奥羽山系の山麓にひっそりと息
づく寒村における重大な年中行事である盆の終わりを、老婆の姿をかりて如実に描きだしてい
る。沢内甚句の哀調もきこゆるがごとき抒情ゆたかな作品である。

夜の秋黒子素早く影と去り

金丸 鐵蕉

檜枝岐歌舞伎である。黒子は役者の出演中その背後に控えて一切の世話をする。光と影の間
柄である。地味でありながら重要な役割で、むしろ役者のでき不出来も黒子によるところ大
なるものがあるといわれている。夏の終わりの涼しさがましてきた山村に見る歌舞伎、勿論素人
であろうが、伝承された芸の誇りはまた格別であろう。黒子の活躍も十分うかがわれる。そし
て舞台の変わり目に素早く影と去った黒子に作者の鋭い観察の目がそがれ、この無形文化財

に対する興趣と敬意の心が一層ました。

緑 釉 の 育 つ 焰 色 や 罌 雲 中台 泰史

蒲郡鍛錬会作品。緑釉がどういう種類のうわぐすりか知らないが、焰色と罌雲のつながりによる具象性はすばらしい感覚である。林火先生もご講評に「育つがこの句の眼目であり、この言葉でこの句は生きる」と賞された。

満 月 に 逢 は ず 散 り ゆ く 辛 夷 か な 納 漠 の 夢

滋味溢るる作品である。辛夷の白い大形の花は春来るの感がつよい。春を待つ気持ちは私達年輩者の共通の願いである。離を得れば蜀を望むもこれまた人情の常であろう。満月の下咲きはこる辛夷の花、思うだけでも心がはずむ。しかしその満月を待たず辛夷は散ってしまった。作者の辛夷に寄せる愛情、悲しみ、それは知命を越えた自分自身に対するものでもあろう。心の屈折をつよく訴えている。

て の ひ ら に 小 机 拭 ふ 暮 春 か な 小山 梧雨

日常生活のさりげない動作や事柄に作者は直截な観察眼をもって佳句をよく詠んでいる。愛情あふれる豊かな心の持ち主であるからであろう。私などでは俗に墮するおそれがあるところをきちんとしめている。そして読後何ともいえぬ親近感をおぼえる。まことに得がたい個性あふるる作者である。この句、「てのひらに」が春の暮の物憂い、それでいて何か心残りあるさまをしみじみと物語っている。

青 花 摘 む 湖 の 水 照 り 遠 景 色 恩賀とみ子

この年七月、林火先生は草津名所図絵にある青花摘みを見に草津市山田を訪ねられた。そして「近江野に青ばつちりと青花摘」等年中行事の再発掘として俳壇に旋風をまき起こした佳句の数々を発表された。掲出の句はその折先生にお供しての作品であろう。青花摘みを直接捉えずに、湖の姿を遠景として描くことによって青花摘みを却って読者の身近にし、成功したと思う。心配りの利いた作品である。

—昭和四十九年

祭 来 と 辛 夷 白 撒 く 越 の 天 中 川 美 亀

素晴らしい大景だ。辛夷の花の咲きはじめて越路の春の息吹きが鮮やかに映像される。「白撒く」は適切な春への歓喜の表現だ。「越の天」も豪快に語を緊めている。一読してその景が浮かぶ画然とした句である。女性特有の審美眼が「白撒く」にひそめられているとはいえ、その情緒が更におおらかな展開を示したと見るべきか。美亀俳句の骨格はもとより繊細優美の情緒にあるけれども、この句の如き景を画然と描いた句にも心ひかれるのである。

雉子翔ちしあとの日向を親しみ行く 白井 米子

作者は山路を歩いてゆく。突然行き先に雉子が翔びたつた。やがて作者はその辺りにさしかかった。あの草むらのあたりだろうか、先程の雉子が翔つたのは。そこで作者の歩がとどまる。ふりそそぐ陽光が雉子の翔びたつたあとにまだ波だつていよう。「親しみ行く」は感動を押さえたことばである。雉子の尾羽の五彩の漂う日向を鮮やかに感じながら、ある事象の変化をすかさず感じ身内にしみじみと温めながら作者は山路を歩んでゆく。美しくも明るい句である。

俘虜のごとく王者のごとく雉子白し 大 串 章

実に思い切った表現である。俘虜と王者。まったく相反した性質の両者である。それが白雉子のどちらにも通じ合うのだから不思議である。何故か。直感力の恐ろしさである。一瞬にして感じ取った作者の心の陰影は、白雉子を俘虜と見、王者と感じたのである。何の躊躇もない直感の表現なればである。自由奔放な詩情をうらやましく思う句である。たまたまこの時私は作者と同行した。一羽の白雉子に執してその場を動かなかった作者の詩心が、素晴らしい飛躍を生んだ。あくまで一羽の白雉子を見つめた果ての秀作である。白雉子の汚れを俘虜、美しい雉子を王者との見立ては平凡であらう。

大 神 の 賜 ひ し 霞 身 に ま と ふ 濱 本 暁 生

先般私は大和三輪近く遊んだ。香久山も耳成山も、少し離れて畝傍の山もすっかり霞に沈み、その頭だけが雲海にあるごとく浮かんでいた。まさしく三輪の大神の賜いし霞であった。いまこの句に接して共感おのずから切なるものがある。然も作者はその霞を身にまといっている。神の意に従っているのである。温容なる氏の風貌が偲ばれ、句は人なりを感じる。

夕ざくら水に落ちたるものひびく

田中 螺石

高野山関西大会の所産。林火先生の講評を要約すると「水に落ちたるものは何であるか、その穿鑿は不要である。ただ水面を切るるといふ音を感じればよい。満開の夕ざくらが水面を覆い、静寂、如何なる微細なものが落ちてても水は響くであらう。静寂の極みである。それだけにこの音はきびしく冷たい音。いえばこの音は花の終わりと思わせ逝く春を惜しむ音ではないか。眼前、花爛漫、人々は春に酔うが、作者はその中に花の終わり、春の終わりを知り嘆くのである」蛇足は費やすまい。今年も春が逝く。慌しく匆忙の春であった。思い出させる句である。

風光る湖まろき地に赴任せり

村上一葉子

諏訪市の合同庁舎は諏訪湖のすぐ水際にある。湖畔には榎櫓の並木がつづき、湖は茫洋と拡がる。あるとき私は雨の早晩この湖畔を歩いて作者の勤務されているという庁舎を知ったが、早朝ゆえ訪うことができなかった。この句は春、「湖まろき」は諏訪湖の実景をよく伝えて適切。春光湖を溢れて、赴任したばかりの作者の希望が充ちている。大景を写して情、景おのずから融合して心よい。信濃路は湖も山も人の心を和ませてくれる地である。

わらび山教へて呉れて死ににけり

平野 彩霞

作者は北海道常呂の住人。この句、平明にして格を得ている。わらびのよく生える秘密の場を教えてくれた人の死である。山国の人微笑をさそう挿話としての鑑賞は当然であるが、彩霞はその死期を予知していたのではなからうか。とすればこの句に重々しい作者のかなしみが重なってくる。それ故に淡々と詠い上げてさらにかなしみが添う。

安息の今日も干潟も失せつつあり

宮津 昭彦

夕ぐれの干潟に湖が満ちはじめた。もう汐干の人達も、遊んでいた水辺の鳥どももすっかり姿を消した。干潟は徐々に平面の海と変貌してゆく。きょうの安息の平穏とともに暮れてゆく充足感。然しながらわれわれの誰しもが負っている社会的不安は、その苦悩の中の生活者に絶えず襲っているのである。この句から何故そんな思いが展開してくるのか。「失せつつあり」に私は不安を感じるからである。季語「干潟」のもつおらかな広がりや景として眼前に写し出し、その後に展開されてくる心理的作用が揺曳するのは私の鑑賞過剰であろうか。ともあれ干潟の句として異色。

朴咲けるもとの一石僧のごと

村越 化石

この朴の花に清浄を感じる。高野山南院の朴の大樹は見事である。丹後宮津から大江山を越えたとき深山の空高くに見た朴の花は見事であった。朴の花はそうした場にふさわしく孤高を保つというに尽きる思いがする。まさにこの花の下の一石こそ僧に似て当然である。そして一石を僧と見た化石氏の風貌もまたそれに似通うのではなからうか。

夏至の夜の北の都の時計台

町田しげき

何と心よくひびくすがすがしい句であることか。私は札幌をまだ知らない。だが、一読してその景が浮かぶ。時もよし夏至の夜である。北海道を代表する季節は、雪と夏至の頃か。昼の名残りの残影がしらじらと時計台を浮き彫りしているのであろう。「北の都」とはいい得たと思う。

稲掛けにさらに稲被せ木曾入日

中台 泰史

木曾敷原の近くに衣更着神社という小さな社があった。「きざらぎ」のことは実に木曾にふさわしいと思った。この句は木曾の稲掛けを素直に見たまま表現した。「稲被せ」が実景を伝えてあわれでもある。木曾の切なさがある。景を写し取ること即ち情を写すことになる。教えられ、いつも吟味する句である。

火の動き透くを提げゆく白切子

稲垣法城子

子供のころ精霊送りの夜はたのしかった。新盆の家の灯笼送りはことに華やかだった。灯笼、切子に灯を入れて精霊舟を浜辺まで運ぶ。火が揺れるのでゆっくり歩んだ。たしかに火の動きが透いて見えた。精霊舟が海へ下ろされて波の上を曳かれてゆくとともに灯笼の火かが揺れていた。的確な写生句はこのような回想でさえ鮮やかによみがえらせる。

薬害の白髪 of 粗き木の葉髪

鹿山 隆濤

「演」昭和四十九年十二月号「今年的一句」に作者は「私の病歴も早や三十六年目」「長い闘病ともなれば薬も強いもの、そして量も多くなる。身に入みて馬にやるほど薬来る。抗生物質の連続投与によって、胃腸、口中を荒らし薬害が全身におよぶ感がある。これは長い病人に

とつて宿命という外はない」と述べている。句解の要はない。粗き白髪はあわれという外ない。しかしながらこの句に秘められている心情は自ら苦難を乗り越えねばの意志がある。益々の自愛を祈りたい。

夜寒なほ叱咤死神離すべく 吉田 幸子

この句は単なるドラマの傍観ではない。ある人物を激しく叱咤し励ましている。夜の底に疲れ果て正体もなくず折れて泣き伏している人物の頭髪は乱れていよう。叱咤する人もまた必死である。夜寒が生々しい。春なお寒い高野山のできごとである。会合に遅れた作者は既に人気の少ない南海高野線の車中であつた。ふと見ると車内片隅に一人の若い女性が心なしか沈み、伏せ目がちに時折深い溜息を洩らしていた。作者はいち早くその一切の状況を察知し、その女性に声をかけた。宿坊南院までの同行の道すがら叱り励まし、死よりの脱出についての説得がつづいた。話に依ると果たして高野山に死に場所を求めていたのだつた。作者吉田幸子とはそうした人である。仏を詠んで他の追隨を許さないこの人は情の深い人である。

寂寞と冷ゆ埋め墓と無数の石 土田祈久男

丹後野原の両墓制は民俗史上でも珍しい存在で、今なおこの風習を守っている。祈久男はこの地に執した。野原は戸数七十戸、半島の孤村である。詣り墓は山手の高みに立派な石塔が並び、埋め墓は村のはずれの海際にあつた。墓石は「無数の石」の中で大きなものを乗せただけで、その石には家の紋や仮名一字の符号の如きものが書かれていた。この句は冷たい海風の荒涼と吹きすさぶ中の埋め墓の状態を写している。無数の石は、埋め墓の石と周囲の磯石も含まれるであろう。累々たる石は墓というより賽の河原の凄惨を思わせたに違いない。「寂寞と冷ゆ」は真実冷える埋め墓の石と佇む作者の生身である。

人去りて冬の桜の息づかひ 金子 篤子

林火先生の句に「大いなる翳に咲き出で冬桜」がある。いずれもあたたかみを感じ冬桜の咲けるさまをよく伝えている。この句の「息づかひ」は女性特有の優美な感覚で受けとめ、その消息を伝えて艶である。この作者は派手な華麗な句は少ない。むしろこの句のようにいつも静かに凝視して見届けた句に光彩がある。冷気の中に咲く桜に深い愛情がこめられてこそ花の「息づかひ」も感じられるのである。

雪の祠一人詣でて道とどく

中戸川朝人

「道とどく」の発見はいい得て妙。雪の足あとが祠の前までつづく、そこまでは道の延長。選ばれたことばはその言葉によって最大の効果を上げねばならない。「道とどく」は景と情を融合させた最適の言葉であった。雪の山路につづく一人の足あとと、詣でる人の辿り得たという心情が要約されている。

山へ大股冬帽に髪とちこめて

山上カヨ子

最近の「濱」誌上の最も潑刺とした作家ではなからうか。自由な発想と表現は、ときに本道から外れそうな句も見受けられるが、なかなか道を外れそうもない。詩の核を弁えているのだ。掲句の如きは実に生き生きとした躍動があり、「山へ大股」の大胆さ「髪とちこめ」の要点的把握、瑞々しい表現は今後の期待を担って余りあるであろう。

寒風に双眸を吹き分たれし

増田 達治

善意の生活者とは作者の俳句につきまとう評言であろう。一句一句肌に触れて鑑賞しなければならぬ人間的な句が多い。この句にしても寒風を突き進んでゆく、善意の小心の人間像がある。ひたむきである。抽象画によく見かける鼻高の農夫、眼だけが光って夕暮れの畦を帰る。空の隅の方に赤い冬の夕焼け空が少し、風の音が鼻梁に音を立てる。絵になる構図が浮かぶ。この句は達治氏の自画像に発してさらに飛躍する。眸が吹き分かれるとは鋭い自己発見である。甘美な抒情ははるか彼方に吹き飛んでしまう句だ。

千鳥来てわれを窺ふ遠さにあり

佐野 美智

この千鳥と作者の距離こそ動かし難い。身動きのならない距離である。一步の進退が平衡を失い、崩壊に繋がってゆく。千鳥は絶えず動きつつあるのに、その距離ゆえに均衡を失わぬ。作者が身動きできないのは、作者の心の重みが千鳥に係わっているからである。作者の心の重量は、愛情であり、作者自身のまとう哀歓である。美智俳句には優しみの中に細い鋼線の匂いがある。確かな実景の把握の果ての燃焼は密度が濃く、表現は平明である。千鳥と作者の距離の均衡が、どのようにして崩れてゆくのか。夕ぐれの波音が渚を打って暮れはじめる。

松山の小松はなやぐ牡丹雪

木附沢麦青

氏の俳句の負う郷土の句には常に愛の礎石が根深い。そうした骨格を中心に最近の作風は清澄を加えてきたのではなからうか。小松原に降る牡丹雪を華やくと見立てる作者にかつての闊將の如き緊迫感はなく、安心の域に差しかかった感がある。平常心に物を見られる「間」が生まれて来たのではなからうか。麦青俳句が更に幅広くなって行く期待は誰しも抱いていることであろう。

雪に三日籠りて女性^{にょしよ}名を告げず

内海世潮

作者は高野山南院院主内海上綱である。いろいろの世相の裏の喜怒哀楽が高野にある。人生の縮図だとも聞く。男に追われ寺に逃げ込んだ女。刃傷の果ての懺悔の寺男、種々相があるという。この女性もその浮世の荒波の被害者であらうか。雪に三日の堂籠りに仏恩を得たか、あるいは上綱さまの説得に感じたか、寺を立ち去った。「名を告げず」が女の意志を示すと共に、隠れたドラマの奥行を思わす。

好色のてのひら夏の夜の仙人掌

櫛原希伊子

感覚派希伊子の心の中には色とりどりの魔法のガラスの薄片が一杯詰まっているのではなからうか。私はそんな彼女の本能的な美学を消したくはない。殊更に俳句らしい俳句を作って貰いたくはないのである。そんな作家がいてもいいではなからうか。無理して消すより自然に消えてゆくべきだ。この句は彼女の本当の姿を映しているように思われる。掲句を見て最近の希伊子俳句に持つ不安を一掃したのであった。

今年竹まだ直立の丈にあり

栗飯原孝臣

この句潔く確かである。この句の如き写生句がこの頃少なくなった。素材にのみ走って自然観照がおろそかになっているのではなからうか。この句など実にすがすがしい。「まだ直立」は頗笑ましいし、第一生命感に溢れている。一木一草のおもむきもまたときに佳しとすべきだ。

待春の笑はして生えそめし齒よ

太田土男

那須の農林省草地試験場に勤務。近來その牧草地や牧牛を描いて進境著しく、その句風は絶えず人間的である。子供、牛飼、行商人、草刈などと、勿論自分自身も一緒に親しんでいる。この句、「笑はして生えそめし齒」に明るさがある。親子歡喜の図ともいふべきか。この作者には派手さはない。着実に一歩一歩踏みしめて深く境地を開拓してゆく型だ。好漢さらに前進あらんことを。

(鳴戸海峡)

続々濱百句

昭和五十年～五十三年